

# われわれは目でものをみるのか

## —ミンコフスキー「空間の精神病理学」における暗い空間—

佐藤 愛

ウージェーヌ・ミンコフスキーは主著である『生きられる時間』における最終章を、「生きられる空間の精神病理学のために (Vers une psychopathologie de l'espace vécu)」と題し、時間論として展開してきた著作の最後を空間論で終えている。ミンコフスキーにとって、空間の問題は「時間の問題よりもはるかに難しく」<sup>1</sup>、また、「まだあまり探求されていない、一見しただけでは処女林のように見通しのきかない領域」<sup>2</sup>につながっていた。ここから、ミンコフスキーの「生きられる空間の精神病理学」が展開されようとしていたことが予想されるだろう。しかし、この期待は裏切られることになる。この著作から3年後の1936年に刊行された『コスモロジーへ』の序文において、ミンコフスキーは「いまや、わたしは精神病理学の土地を手放すことにする」<sup>3</sup>と宣言するのであり、これによって「生きられる空間の精神病理学」の展開がもはや見込み得なくなるからである。ミンコフスキーはこの序文において、「生がその上に立っていた足場が崩れ去ってしまった」<sup>4</sup>こと、「瓦礫のなか」で、「人間の思考が細かく砕かれ」、「自己」がもはや「断片化」<sup>5</sup>されたものななかからしか見出せないことを述べ、これら砕かれた思考を集めた「断片群 (fragments)」として、自身の新たな著作を送り出そうとするのである。しかし、この宣言は1967年にこの著作が再版されるに当たって新たに付け加えられた序文において、再び覆されることになる。新たな序文においてミンコフスキーは、この著作が「精神医学と精神病理学の諸問題から相当はみ出している」<sup>6</sup>ことを認めながらも、「だからと言って、これらの問題を放棄したわけではなかった」<sup>7</sup>ことを明言する。これは、どのような意味なのだろうか。ミンコフスキーは、一見すると精神病理学から遠く隔たったように見える『コスモロジーへ』において、精神病理学とどのように向き合おうとしたのだろうか。この問いを明らかにすることによって、『コスモロジーへ』のなかでミンコフスキーによる「空間の精神病理学」が展開された可能性を探ることができるのではないだろうか。

したがってわれわれは、『コスモロジーへ』を巡る立場の揺れ動きのなかでミンコフスキーが描き出そうとしたものを、従来の精神病理学的言説には還元できないが、それでも尚、精神病理学から離れることのない思考とみなし、その具体的様相

を「空間の精神病理学」の一端として浮き上がらせることを目指す。なかでも本稿では、『生きられる時間』から『コスモロジーへ』にかけて引き継がれた主題とみなし得る「視覚」の問題に焦点をあて、これを分析する。手順として、まずは「生きられる空間の精神病理学」の出発点となっている『生きられる時間』の最終章を取り上げ、次に、『コスモロジーへ』で「視覚」の問題が論じられた章を分析する。それによって、『生きられる時間』と『コスモロジーへ』の間に補助線を引き、ミンコフスキーの空間論の一端を提示したい。

## 1. 明るい空間と暗い空間

ミンコフスキーは、『生きられる時間』の最終章を、「生きられる空間の精神病理学のために」と題している。ここで議論の中心に位置づけられているのが、「明るい空間 (espace clair)」と「暗い空間 (espace noir)」についての考察である。ミンコフスキーは、われわれの生におけるこれらの空間の構造を分析し、病的状態においてそのあり方がどのように変化するのかを描きだそうとする。

ミンコフスキーによれば、われわれの「生きられる空間」は、「明るい空間」が「暗い空間」によって「縁取られる (encadré)」<sup>8</sup>ことによって構成されている。すなわち、前者は後者のなかに「はめ込まれ (s'incruster)」<sup>9</sup>ているのである。しかし、病的状態においては「暗い空間」と「明るい空間」とが「二つに分かれ (se dédoubler)」、<sup>10</sup>「重ねられる (superposé)」<sup>10</sup>とする。

またミンコフスキーは、自らが「空間の現象学」と呼ぶものを、「明るい空間と暗い空間、あるいは視覚空間 (espace visuel) と聴覚空間の現象学 (espace auditif)」<sup>11</sup>と言い換える。ここから、『生きられる時間』におけるミンコフスキーの「空間の現象学」が、「明るい空間」と「暗い空間」を中心に構成されるものであり、また、それぞれ「視覚」と「聴覚」とに関わるとみなされていたことが分かる<sup>12</sup>。

では、ミンコフスキーにとって「明るい空間」と「暗い空間」とはそれぞれどのようなものであり、いかなる構造をもっているのだろうか。また、これらが「視覚空間」と「聴覚空間」と言い換えられるとき、ここにはどのような意図があるのだろうか。ここでは、これらの間について論じることによって、『生きられる時間』が「明るい空間」と「暗い空間」、すなわち肯定と否定の「重なり合い」を通して、後者に接近する目論見を含んでいた著作であることを示す。

### 1-1. 明るい空間

まず、明るい空間とはいかなるものなのだろうか。ミンコフスキーにとって「明

るい空間」とは、何よりも「視覚空間の明るさ (*clarté*)」<sup>13</sup>を背景にした空間であり、「最も広い意味において、ただちに (*d'emblée*) 社会化された空間」<sup>14</sup>として描かれる。すなわち、「明るい空間」はその「明るさ」によって、自己における社会的領域を形成するものである。ミンコフスキーは、この空間について次のように述べる。

わたし (*je*) は、少なくともわたしの存在の一面において、自分の周囲の事物を似たもの (*semblable*) にする。わたしはこの空間のなかで、そこにある他の対象に対して、一つの場を占める (*occuper une place*)<sup>15</sup>。

「明るい空間」において「わたし」は「一つの場」を占有しながら、他と「似たもの」になる。この「一つの場」をミンコフスキーは、「距離 (*distance*)」、「延長 (*étendue*)」、「広がり (*ampleur*)」<sup>16</sup>とも言い換える。ここから、「公共的領域」としての「明るい空間」の二つの機能が浮かび上がる。第一に、この空間は自己を、「延長」すなわちある厚みによって空間の一部を担うものとして形成する。自己はこの空間のなかで、すでに、否応なく一つの席を占有しているのである。第二に、この空間は、自己が「一つの場」を占めていることを、他との比較によって自己に知らしめる。自己が自己の投げ出されている場を省みるのは、ただ、自己と「似た」他との比較によってのみである。ミンコフスキーは、上の引用に続けて次のように述べる。

わたし (*je*) はこうしていれば「一平卒の位に下る (*rentre dans le rang*)」。われわれ (*nous*) すべてを組み入れる (*englober*) 空間は、こうして平均化 (*nivellement*) の働きをするのである。こうしてこの空間は、わたしが言ったように「公共的領域 (*domaine public*)」となり、わたしはそこにあるすべてのものとこの空間を分かち合う (*partager*)<sup>17</sup>。

「明るい空間」において「わたし」は、ただちに「われわれ」となる。自己は自己が空間のなかにある「延長」をもって「組み込まれて」しまっていることを、自己に「似たものたち」を介して省みる。このとき、「明るい空間」は「社会化された空間」<sup>18</sup>としての「公共的領域」となる。

さらに、この「公共的領域」としての「明るい空間」の第二の機能である、自己と他を並べ比較する機能こそが、「明るい空間」が「視覚空間」<sup>19</sup>と呼ばれることを可能にする。ミンコフスキーは、次のように述べる。

わたしがそこで占めるのは、ほんの小さな場 (*bien petite place*) でしかない。わたしが、わたしに似たものたち (*mes semblables*) がわたしのように (*comme moi*) まなざし (*regarder*)、動き (*se mouvoir*)、振舞い (*agir*)、生きる (*vivre*) のを見る (*voir*) のもまた、この空間においてである<sup>20</sup>。

「明るい空間」のなかで「わたし」は、「わたしに似たものたち」が「わたし」と同じように「振舞う」のを、「見る」。したがって、「明るい空間」における「生理的でない視覚」<sup>21</sup>とは、「明るい空間」の第二の機能である自己の投げ出されている場を他との比較によって省みることを示す<sup>22</sup>。

このように、「明るい空間」とは、「公共的領域」として自己に「一つの場」を与えたとともに、自己に対し、その場が他とともに「分かち合われて」いることを「見せる」ものである。これら、「明るい空間」の第一の機能によって自己が場を与えられることと、第二の機能によってこの厚みを持った自己が「わたし」から「われわれ」になることは、一挙に行われる。この意味において、「明るい空間」とは「ただちに (*d'emblée*) 社会化された空間」<sup>23</sup>である。

## 1-2. 暗い空間

次に、ミンコフスキーにとって「暗い空間」とはいかなるものなのだろうか。ミンコフスキーは「暗い空間」について、次のように述べている。

今度は、何も見えないほど暗い、黒い夜を想像してみよう。(中略) この闇 (*obscurité*) は、単なる光の欠如ではなく、何か非常に積極的なものを持っている。闇は、そこにある対象の物質性 (*matérialité des objets*) の前ではいわば影が薄れる (*s'effacer*) ような明るい空間よりも、もっと物質的 (*matériel*) で、もっと「内容の詰まった (*étouffé*)」ものであるように思われる<sup>24</sup>。

このように、ミンコフスキーにとって「闇」は「明るい空間」に対して、単純に「光」が失われたものでもなければ、劣位に置かれるものでもない。むしろ、「明るい空間」よりもより「内容の詰まった」、豊かなものとして記述される。「明るい空間」は、そのなかにある個々の対象の「物質性」によってその空間そのものの「影が薄れ」てしまうのに対し、「暗い空間」は、この空間そのものが「物質的」で豊かなものである。

では、この空間と自己とは、どのような関係にあるのだろうか。ミンコフスキー

は、次のように述べる。

闇は、わたしの前 (devant moi) に広がる (s'étendre) のではなく、直接わたしに触れ、わたしを包み、わたしを抱きしめ、わたしのなかに入り込み、全体に浸透し、わたしを介して通過する。したがって、自己は闇に対しては透過性 (perméable) であるが、光に対してはそうではないと言いたいくらいである。自己はこのように、闇に対しては自らを主張せず、これと混ざり合い (confondre)、一つのものとなる (ne fait qu'un avec elle) <sup>25</sup>。

「闇」に対し自己は、「明るい空間」のときのように、「一つの場」を占めることによって自らを打ち立てたりはしない。自己は、「闇」に対して「透過性」を持つため、「闇」を受け入れ、「混ざり合い」、「一つ」となるからである<sup>26</sup>。

さらにミンコフスキーは、次のように述べる。

一つの光、一条の閃光が、そこに生じ、消え去るために流星のように闇をよぎることがある。囁き (murmure)、音 (son)、声 (voix) が、そこで上がる。氷のような風がそこを通り抜ける。ときおり、囁きや物音 (bruit) で満たされ、いっぱいになることもある<sup>27</sup>。

上述したように、ミンコフスキーは「明るい空間」を「視覚空間」として、また「暗い空間」を「聴覚空間」として提示した<sup>28</sup>。にも関わらず、ここでミンコフスキーは、「暗い空間」を「囁き」や「音」などの「聴覚的」なもののみならず、「光」や「風」など、それ以外の感覚によって感受されるものによっても記述する。このように、ミンコフスキーにとって「暗い空間」は、「見る」ことすなわち反省によって覆われた「明るい空間」に対し、反省としてではない「視覚」やそれ以外の感覚によって描かれる「内容の詰まった」空間である。

しかし、ここには一つの逆説がある。ミンコフスキーは、自己が「暗い空間」に対して自己を「主張」せず、これと「一つ」になると述べた。だが、そのような自己は、果たして「闇」の経験を豊かなものとして持ち帰り、記述することができるのだろうか。われわれは「暗い空間」が、「光」や「風」や「囁き」など、さまざまな感覚によって感受されるものであることを確認したばかりであるが、ミンコフスキーは次のようにも述べている。

暗い空間は完全にわたしを包み込み、明るい空間よりもはるかによくわたし

の内に浸透するのであるから、内部と外部の区別や、したがってまた外的知覚に向けられたものとしての感覚器官 (les organes des sens) は、ここではまったく目立たない役割しか担わない<sup>29</sup>。

このように、ミンコフスキーは「暗い空間」における「光」や「風」や「囁き」を描いたにも関わらず、「暗い空間」における「外的知覚に向けられたものとしての感覚器官」の役割を、ほとんど切り捨ててしまう。われわれは、いかにして「暗い空間」について経験し、記述することができるのだろうか。また、「暗い空間」の経験において働く「外的知覚に向けられたものとしての感覚器官」ではない感覚とは、いかなるものなのだろうか。ミンコフスキーは、「明るい空間」と「暗い空間」を描いた後、これらの問いに応えるかのように、通常の状態と病的状態それぞれにおけるこれらの空間の構造を論じようとする。したがって次に、ミンコフスキーの論じる二つの空間の構造について分析することで、この問いを論じたい。

### 1-3. 「明るい空間」と「暗い空間」の乖離と折り重なり

ミンコフスキーは、上述した「明るい空間」と「暗い空間」とが、通常の生においては、「非常にうまく調和し合っており、病的な性質は、これらの関係の乱れによってのみ成り立つ」<sup>30</sup>とする。二つの空間によって形成される通常の「生きられる空間」の構造について、ミンコフスキーは次のように述べる。

空間を生きる二つの仕方の間の関係は、明るい空間が暗い空間によって縁取られている (encadré) とか、そのなかにはめ込まれている (s'incruster) とか言うことによって、最もふさわしく表現されるのではないだろうか<sup>31</sup>。

ミンコフスキーは、われわれ「通常の生」において「明るい空間」と「暗い空間」とが、前者が後者によって包摂され、額縁のように「縁取られて」いるとする。われわれはこれらの空間の両方を「生きる」ことができるが、前述したように「暗い空間」を「生きる」とき、この経験のなかでわれわれの「自己」は消え去ってしまうため、この空間の経験を経験として記述することはできない。「通常の生」において、「暗い空間」はわれわれにとってどこまでも「暗い」ものに留まるのである。しかし、それでもミンコフスキーは「暗い空間」について記述する。これは、どういふことだろうか。

この問いに応えるために、ミンコフスキーが「通常の生」の形式に続いて描写する、「病的な生」について追っていきたい。ミンコフスキーは、「病的な状態」にお

ける二つの空間の構造について、精神医学者フランツ・フィッシャーが上げる患者の例を引きながら、次のように述べる。

「わたしはまだ覚えているのですが、」とこの患者は話した。「秋の景色が（彼はそれを目の前にしていた）、場所を変えないのに、もう一つ別の、非常に繊細で目に見えない、ほとんど確かめられないような空間に浸透されていました。この第二の空間は、暗く（obscur）、あるいは空虚で、あるいは恐ろしいものでした。これらの表現のどれが一番真実に近いかを言うのは難しい。あるときはある空間が動くように思われ、また、あるときはそれらは互いに貫き合いました。それらは、交差し合い（s'entrecouper）しました。」<sup>32</sup>

フィッシャーの患者は、ここで、ある空間への別の空間による「浸透」について述べる。日常的な「秋の景色」に浸入した「第二の空間」は、「繊細」で、「目に見えず」、「確かめられない」ものであり、また、「暗く」、「空虚」で「恐ろしいもの」として語られる。さらに別の箇所ではミンコフスキーは、患者たちが経験しているであろう空間構造について、次のように結論づける。

彼〔患者〕は、互いに乖離（dissocié）し、重ねられた（superposé）二つの世界として、空間を存在している<sup>33</sup>。

ミンコフスキーは、われわれの「通常の生」においては「明るい空間」が「暗い空間」によって縁取られ、裏打ちされているのに対し、患者においては、これらの空間が「乖離」<sup>34</sup>した上で、「重ねられる」と考える。さらに、ミンコフスキーはこのような空間の「乖離」と「重なり」を、空間が「二分する（se dédoubler）」<sup>35</sup>ことや、「オーバーラップ（chevauchement）」<sup>36</sup>といった語によって言い換えている。このように、「病的な生」において、「明るい空間」を裏地として支えていた「暗い空間」は、引き離された上で、この上に折り重なってくるのである。

ここまで、ミンコフスキーによって分析された「通常の生」と「病的な生」における「明るい空間」と「暗い空間」の構造についてそれぞれ確認してきたが、これによって彼は何を示そうとしているのだろうか。われわれは上で、「暗い空間」を記述することの矛盾について指摘した。しかし、ミンコフスキーはここで、患者の言葉を借りることによって、「暗い空間」を記述しようとする<sup>37</sup>。われわれは、確かに「暗い空間」を豊かな「暗い空間」そのものとして経験し、これを持ち帰ることができないだろう。だが、ミンコフスキーは患者の力を借りることによってこの空間

の一端が示し得ると考えたのではないだろうか。そして、これこそがミンコフスキーがこれから展開させようとした「空間の精神病理学」の可能性だったのではないだろうか。

しかし、患者にとって、この「暗い空間」を経験することはあくまで「恐ろしい」<sup>38</sup>ものであり、「虚無」<sup>39</sup>に開かれていた。したがって、『生きられる時間』は、「暗い空間」のこのような重みとしての側面に捧げられた著作であったと言えるだろう。そして、この「暗い空間」の重みを引き受ながら、これを弾み車として変換するために、『コスモロジーへ』が準備されたと考えられる。

## 2. コミュニオンとしての感覚

『生きられる時間』の出版から3年後の1936年、ミンコフスキーは「精神病理学の土地を手放す」著作として、『コスモロジーへ』を送り出す。そして、このなかのひとつの章に、彼は、「われわれは目でものを見るのか (Voyons-vous avec les yeux?)」という一見奇妙なタイトルを付す。ミンコフスキーはここで、「闇」の空間論及びそこにおける器官によらない感覚を論じようとするのである。

上述したように、『コスモロジーへ』におけるミンコフスキーの「精神病理学」に対する態度は揺れ動いており、ここでわれわれが取り上げる章においても、直接的には「精神病理学」の問題は取り上げられない。では、いかにしてこの章及び『コスモロジーへ』という著作が、「空間の精神病理学」に捧げられたものとしてみなし得るのだろうか。

ミンコフスキーはここで「闇」の空間論を論じるために、「公共的領域」としての「明るい空間」ではなく、「生物学的な領域 (domaine biologique)」<sup>40</sup>を介そうとする。この「生物学的な領域」において問題となるのは、「われわれの有機体 (notre organisme)」<sup>41</sup>であり、「身体的自己 (moi corporel)」<sup>42</sup>であり、また「動物的な何か (quelque chose « d'animal »)」<sup>43</sup>である。ここから、ミンコフスキーが『コスモロジーへ』において、「精神病理学」から離れつつも、この領域について思考するために、「明るい空間」に対するものとしての「暗い空間」や、「通常」の世界に対する「病的」な世界ではなく、われわれの「動物的な何か」<sup>44</sup>を経由しようとしたと考えられる。「動物的」なものを經由することによって、「暗い空間」は、よりいっそうわれわれに根源的に張り付いてくるとともに、自律性を強めていく。ここでは、このような展開を追うために、この章における「視覚」論を追っていきたい。

## 2-1. 生物学的領域

『コスモロジーへ』において、ミンコフスキーは、世界を感じるということという日常的な経験から出発しようとする。この断片的思考群の一つが、われわれがここで取り上げる「われわれは目でものを見るのか」と題された章である。この「われわれは目でものを見るのか」という問いは、『生きられる時間』の最後に描き出そうとした「生理的でない視覚」<sup>45</sup>と結びつくものとみなし得る。

しかし、ミンコフスキーはこの章において、「生理的でない視覚」という、一見するとただ観念的な空想にすぎないような感覚を、すぐに語ろうとはしない。彼はこれについて記述するために、「生物学的な領域」<sup>46</sup>及びそこにおける「恐怖 (terreur)」<sup>47</sup>や「動物的」<sup>48</sup>なものを經由しようとするのである。

なぜ、「開」の空間における「生理的でない視覚」を語るために「生物学的な領域」が必要となるのだろうか。ミンコフスキーは、この章の冒頭で見えることと見えないこと、及び視覚と非視覚の関係性についてしばし観念的に考察した後で、次のように述べる。

肯定 (affirmation) と否定 (négation) の結びつき (union) はより親密なものに見えてくる。(中略) しかし、このような結びつきの特徴はどこからやってくるのだろうか。この問いに答えるために必要なのは、意識的に目を閉じて、いわば冷静に、かつ科学的な実験の名の下に事実の確認に頼ることではない。むしろ、失明もあり得るという考えがわれわれに吹き込む恐怖に照らし合わせることである<sup>49</sup>。

このように、ミンコフスキーは「視覚」の経験を、見える／見えない、視覚／非視覚の観念的戯れから、今見えているものが見えなくなると想定した瞬間に立ち上がる、「動物的」な「恐怖」の次元まで引きずり下ろそうとする。この「恐怖」を感じるとき、われわれは、われわれの「生」に「否定性」が常に切迫していることを確認するのである。このようにしてミンコフスキーは、物が見える状態と見えない状態、すなわち「肯定」と「否定」の親密な「結びつき」が、観念的に理解されるものではなく、「恐怖」を介して直接的に「感じられる」ものである点に着目する。

さらにミンコフスキーは、「否定」について次のように述べる。

われわれの有機体 (notre organisme) が一言で言えば傷つき得る (vernérable) といったような事実が、日頃身体的な自己 (moi corporel) と呼ばれているものの意識の基礎 (base de la conscience) を成している。(中

略)不在の意識 (conscience de l'absence)、すなわち否定が生(生物学的な諸条件)に関するあらゆる経験の構成要素となっている<sup>50</sup>。

ここでミンコフスキーは、われわれが「可傷的」であるという事実が、「身体的な自己」の「意識の基礎」になっているとする。この「可傷性」は、「身体的な自己」の意識において、「不在」や「否定」として、常にまわりついてくる。こうして、観念的実験によってはたどり着くことのできなかつた「肯定」と「否定」の「結びつき」は、意識に対する無意識や、反省に対する非反省ではなく、「恐怖」や「可傷性」という身体的・生物学的なものを通して示される。

こうしてミンコフスキーは、『生きられる時間』で示した「明るい空間」と「暗い空間」とによって編まれる織地を、人間的なもののみならず、動物的なものの領域まで拡大しようとする。ミンコフスキーは次のように述べる。

人間にも動物にも同じく固有なものであるこの恐怖には、まぎれもなく「動物的な」何か (quelque chose « d'animal ») がある。この動物的な何かは、恐怖に「生物学的」な事象の性質をただちに与えるものであり、また、(中略)われわれの生 (vie) を構成している諸現象の総体の内において場を割り当てられるものである<sup>51</sup>。

このように、「動物的」なものとしての「恐怖」は、われわれの「生」において場を割り当てられこれを構成する。こうして、『生きられる時間』において、「明るい空間」すなわち「社会化された空間」との対比を通して描き出された「暗い空間」は、これとは対照的に『コスモロジーへ』においては、「生物学的領域」を介して「否定性」として描かれ、よりわれわれに根源的に張り付くようになる。われわれの「空間」には他者たちだけではなく動物たちがいることを、われわれは「恐怖」を通して省みることができるのであり、これによって、他者や動物たち以外の「何か」にまで「明るい空間」と「暗い空間」の成す織地が拡大され得る可能性が密かに示されるのである。

## 2-2. コミュニオン

こうして、「目でものを見るのか」という一章においてミンコフスキーは、『生きられる時間』で取った手続きとは異なる過程を歩み、「暗い空間」を描こうとする。『生きられる時間』では、「暗い空間」の考察の前に「明るい空間」の考察が経由されたのであり、ここで両者は、対称関係を成しながらわれわれの「生」においては

め込みの構造を持っていることが描かれた。しかし、われわれが取り上げる『コスモロジー』への一章においては、今見てきたように、まず「生物学的領域」の記述が介される。この領域は、「暗い空間」と対称関係にあるものではない。この領域は「肯定」と「否定」、われわれの「生」における「暗い空間」と「明るい空間」が交わり合う領域であり、ここでは、『生きられる時間』で取り上げた患者の「病的世界」と同様に、二つの空間が「オーバーラップ」<sup>52</sup>する。こうして、この領域を横断し身体的・動物的「可傷性」を蓄えるという手続きを取った後、ミンコフスキーはこの「可傷性」の重みによって一挙に「暗い空間」に自己を置き、同時に、この重みが豊かさとして生成される様に立ち会おうとする。

ミンコフスキーは、この空間について次のように述べている。

そこには目に見えるものがあるのだから、たとえ器官や特殊な装置が問題にならなくとも、わたしにそれが見えるということはまったく自然なことに思われる。もちろん、この「わたし」とは特殊な身体組織と結びついた自己のことではない。自己がそこにある限り、すぐさまその無尽蔵な豊かさを探り出してくれる生そのものに関わる自己だけを指している<sup>53</sup>。

このように、われわれが「器官や特殊な装置が問題にならない」ような仕方では「見る」とき、「自己」は「無尽蔵な豊かさ」と接続する。すなわち、このとき「暗い空間」と自己とは、器官によらない感覚によって貫かれるのである。

ミンコフスキーは、感覚によって成し遂げられる世界と自己との「コミュニオン (communion)」について、次のように述べる。

いまや、世界は、いかなる点においてもわれわれに働きかける (affecter) ことはない。しかし、世界がわれわれに現前するように、また、われわれが世界にわれわれを現前するように、われわれは対等に世界と合体する (communier) <sup>54</sup>。

このようにわれわれは、「コミュニオン」、すなわち、世界が「いかなる点においても働きかけない」という一見特異な形式によって、世界を感じる。ここには、世界への無能、麻痺によってこそ、世界の豊かさがある。

この「コミュニオン」は、ピンスワンガーやメルロ＝ポンティがそれぞれ展開したことで知られるため、ここで両者の「コミュニオン」についての記述を参照したい。まず、ピンスワンガーは 1942 年に刊行した大著『人間的現存在の根本形式と

認識』において、「コミュニオン」について言及しながら、ハイデガーの「配慮 (Besorgen)」概念の限界を指摘している。

配慮は複数性 (Mehr-) 及び多数性 (Vielheit) へと個々を導き、それゆえ、協力 (Kooperation) とコミュニケーション (Kommunikation) へと個々を導く。しかし、コミュニオン (Kommunion) と二元的な我々性 (dualen Wirheit) には導かない<sup>55</sup>。

ビンズワングァーはハイデガーの「配慮」概念が、「複数性」や「コミュニケーション」を可能にするが、「コミュニオン」や「二元的な我々性」には導かないことを批判する。「二元的な我々性」とは、われわれがわれわれに折り重なる二重の「我々性」であり、単なる「多数」や、一元的な「我々性」とも異なる。「コミュニオン」は、一元的な「我々性」によってではなく、折り畳まれた二元的「我々性」によって実現される。われわれは、『生きられる時間』においてミンコフスキーが「明るい空間」についての考察のなかで、「明るい空間」が自己が「小さな場」を持ちながら、他とともにこの空間が「分かち合われて」いるのを「見る」空間であることを確認した。したがって、ここでのビンズワングァーの言及と接続すれば、「多数性」及び、多数であることによって可能になる個々の「コミュニケーション」は「明るい空間」で成されるものであり、折り畳まれた「我々性」としての「コミュニオン」は、「暗い空間」と「明るい空間」との重なりにおいてこそ可能になるものである。

さらに、このビンズワングァーの「コミュニオン」についての言及から二年後の1945年、メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』において、「コミュニオン」を「感覚」から述べようとする。

感覚は、文字通りコミュニオンに他ならない。(中略) 反省はそれに先行する非反省的なものを明らかにし、自らを始まりして自身が理解し得る可能性を示さなければならない。(中略) われわれが感覚を共存としてあるいはコミュニオンとして定義することによってなしているのは、そういうことである。

(中略) 感覚は十分な明瞭さによって構成されるのではなく、潜在的なままにとどまる一種の知によって再構成されもしくは取り戻される<sup>56</sup>。

このように、メルロ＝ポンティは「感覚」を「コミュニオン」として定義する。メルロ＝ポンティにおける「感覚」は、ここで、ビンズワングァーが「二元的我々性」と呼んだもの、すなわち「反省」とそれに先行する「非反省的なもの」の「コミュ

ニオン」として述べられる。したがって、メルロ＝ポンティは反省が非反省を取り上げようとする際の「暗い空間」と「明るい空間」との重なり合いによって「コミュニケーション」が成されるとしており、この点においてビンスワンガーと一致しているだろう。

さらに、メルロ＝ポンティはこの「コミュニケーション」としての「感覚」について、次のようにも述べる。

あらゆる感覚は、夢 (rêve) や離人症 (dépersonnalisation) の萌芽を含んでおり、これをわれわれは、それにすっきり身をゆだねるときに陥るような種類の麻痺 (stupeur) を通して体験する<sup>57</sup>。

このように、メルロ＝ポンティは「感覚」のなかに「明るい空間」と「暗い空間」の重なり合いを見るときに、「夢」や「離人症」の「萌芽」を読み取る。この「萌芽」は、「暗い空間」の自律性の「萌芽」であり、醒めながら見る「夢」の「萌芽」である。

したがって、ミンコフスキーとビンスワンガーは、「コミュニケーション」において二重にされた「我々性」を見ているのであり、このとき、一方の「我々性」は「暗い」ままにとどまりながらもう一方の「我々性」を裏から支えているだろう。そして、メルロ＝ポンティによれば、この「暗い」ままにとどまる「我々性」は、常にもう一方の「我々性」が身を浸している「明瞭さ」のなかに隔たりを生み出し、自己をずらす。そして、この自己と自己のずれの「萌芽」は、われわれに目覚めたままで「夢」を見、「麻痺」によって世界を感じることを実現させるだろう。ミンコフスキーはこの「麻痺」を、「コミュニケーション」における世界への無能として記述したのであり、これこそが世界とわれわれの臍の緒なのではないだろうか。

### 3. おわりに

ここまで、われわれは『生きられる時間』と『コスモロジーへ』におけるミンコフスキーによる「暗い空間」の分析を追ってきた。「暗い空間」は『生きられる時間』においては、「明るい空間」との対比のなかで描かれるのであり、『生きられる時間』はこの「暗さ」を、「病的生」を通して示した著作であったと言える。続く『コスモロジーへ』でミンコフスキーは、この「暗い空間」をただちに「無尽蔵な豊かさ」と接続しようとするのであり、このようにして「暗い空間」を問うことの中にこそ、ミンコフスキーの「精神病理学」に還元されない「精神病理学」の可能性があった

と考えられる。また、この「無尽蔵な豊かさ」への接続の際に手続きとして取られたのは、「生物学的領域」におけるわれわれの「可傷性」という、より動物的かつ根源的「暗さ」を経由することであり、これによって「暗い空間」はその強度を増す。そして、この重みを弾み車へと変換するのは、「コミュニケーション」としての「感覚」によって貰われることだけである。「感覚」に身を委ねた先にある「麻痺」によって無力となったとき、自己は未知の豊かな景色を見るだろう。

<sup>1</sup> Eugène Minkowski, *Le temps vécu : Études phénoménologiques et psychopathologiques*, Paris, PUF, 2005, p. 367. (以下、『生きられる時間』を引用または参照する際にはTVと略記し、その後に当該ページ数を記す。)

<sup>2</sup> TV, 373.

<sup>3</sup> Eugène Minkowski, *Vers une cosmologie : Fragments philosophique*, Paris, Payot, 1999, p. 11. (以下、『コスモロジーへ』を引用または参照する際にはVCと略記し、その後に当該ページ数を記す。)

<sup>4</sup> VC, 9.

<sup>5</sup> VC, 10.

<sup>6</sup> VC, 2.

<sup>7</sup> VC, 2.

<sup>8</sup> TV, 397.

<sup>9</sup> TV, 397.

<sup>10</sup> TV, 389.

<sup>11</sup> TV, 373.

<sup>12</sup> ミンコフスキーは視覚空間と聴覚空間の対比について、1930年4月のシュトゥットガルトでの学会におけるシュトラウスの発表との一致を示唆している。しかし一方で、シュトラウスによる空間の「知覚的」および「運動的 (moteur)」性質の重要視については意見を異にする (TV, 372)。ミンコフスキーは後に『コスモロジーへ』において「闇」の空間論を展開する際にも、「ここでわれわれの運動性 (motricité) はほとんど重要でない」(VC, 138)と述べていることから、彼が自らの空間論において、身体的運動性を排除しようとしていることが分かる。

<sup>13</sup> TV, 372. しかし、ミンコフスキーはこの「視覚」が「生理的 (physiologique)」なものでないことを強調する。ミンコフスキーは、「視覚空間」が「われわれの視覚的感覚 (sensations optiques) の総体に完全に還元され得るということをアプリアリには認めない」(TV, 371)とする。このような「生理的」でない「視覚」がいかなるものなのかについては、後述する。

<sup>14</sup> TV, 393.

<sup>15</sup> TV, 393.

<sup>16</sup> TV, 393.

<sup>17</sup> TV, 393.

<sup>18</sup> TV, 393.

<sup>19</sup> TV, 373.

<sup>20</sup> TV, 393.

<sup>21</sup> TV, 372.

<sup>22</sup> 宮本忠雄は「明るい空間」の特性に着目し、「明るい空間」を「Logosの空間」

と呼んでいる。これに対し、「暗い空間」は「Pathosの空間」と呼ばれる。(宮本忠雄「実体的意識性について—精神分裂病における他者の現象学—」、『精神神経学雑誌』第61巻、第10号、41頁、1959年。)

<sup>23</sup> TV, 393.

<sup>24</sup> TV, 393.

<sup>25</sup> TV, 393.

<sup>26</sup> このような「闇」と自己との関係についてミンコフスキーは『コスモロジーへ』において「合体する (communier)」という語を使用する (VC, 139)。これについては、次節の『コスモロジーへ』についての分析において論じる。

<sup>27</sup> TV, 394.

<sup>28</sup> TV, 373.

<sup>29</sup> TV, 396.

<sup>30</sup> TV, 394.

<sup>31</sup> TV, 397.

<sup>32</sup> TV, 397.

<sup>33</sup> TV, 388.

<sup>34</sup> 野間俊一は、「否定の身体—現代精神医学におけるメルロ＝ポンティの可能性—」において、「解離症」を、「意味の意識」とそれを裏打ちする「生きられる意識」のあいだに乖離が生じたものとして論じている。もちろん、ミンコフスキーが例としてここであげているのは統合失調症患者であり、野間の論じる「解離症」患者とはケースが異なる。しかし、二つの世界の乖離に着目する両者の論点を接続することは意義深いだろう。(野間俊一「否定の身体—現代精神医学におけるメルロ＝ポンティの可能性—」、『思想』No. 1015、2008年第11号、p. 200-213 参照。)

<sup>35</sup> TV, 389.

<sup>36</sup> TV, 397.

<sup>37</sup> メルロ＝ポンティもまた、「分裂病者の世界に侵入してくる暗い空間は、明るい空間と結びつくことによってしか、空間として正当化されないし、空間性の資格を満たすことができない」としている。(PP, 334.)

<sup>38</sup> TV, 397.

<sup>39</sup> TV, 397.

<sup>40</sup> VC, 135.

<sup>41</sup> VC, 134.

<sup>42</sup> VC, 134.

<sup>43</sup> VC, 133.

<sup>44</sup> VC, 133.

<sup>45</sup> 注13参照。

<sup>46</sup> VC, 135.

<sup>47</sup> VC, 133.

<sup>48</sup> VC, 133.

<sup>49</sup> VC, 132.

<sup>50</sup> VC, 134.

<sup>51</sup> VC, 133.

<sup>52</sup> TV, 397.

<sup>53</sup> VC, 140.

<sup>54</sup> VC, 139.

<sup>55</sup> Ludwig Binswanger, *Grundformen und Erkenntnis Menschlichen Daseins*, Zürich, Max Niehans Verlag, 1942, p. 269. 尚、この点については木村敏先生のご

教示による。

<sup>56</sup> Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945, p. 246-247.

<sup>57</sup> *Ibid.*, p. 249.

**Voyons-nous avec les yeux? :**  
**L'espace noir dans « une psychopathologie de**  
**l'espace » chez Minkowski**

Ai SATO

Dans le dernier chapitre de son œuvre principale, *Le temps vécu*, Eugène Minkowski propose « une psychopathologie de l'espace vécu ». Trois ans plus tard, il publie un nouvel ouvrage, *Vers une cosmologie* comme fragments philosophiques. Dans l'introduction, il déclare son intention de délaisser le terrain psychopathologique en affirmant curieusement qu'il ne l'abandonne pas. Qu'est-ce que ces deux propositions contradictoires signifient ? Nous les considérons comme des hésitations devant sa nouvelle psychopathologie de l'espace. Minkowski ne pouvait pas la réduire en elle ordinaire, il devait donc présenter sa recherche dans un cadre élargi.

Comment décrivait-il sa psychopathologie élargie ? Nous nous trouvons au cœur du problème dans sa description sur « l'espace noir ». Car il nous semble qu'elle rejoint le dernier chapitre du *temps vécu* et de *Vers une cosmologie*. « L'espace noir » est décrit en contraste avec « l'espace clair » dans *Le temps vécu*, mais dans *Vers une cosmologie*, il le dépeint après une réflexion sur « le domaine biologique ». Cet écart correspond à l'intensité de l'autonomie de « l'espace noir » dans ces deux livres.

Dans « le domaine biologique », « l'espace clair » et « l'espace noir », l'affirmation et la négation s'unissent. En traversant ce chevauchement, le poids de la négation rejoint quelque chose de « riche ».